

第2回 トマス・アクィナス

楽観ではない希望について

Doctor Angelicus (天使のような博士)



15世紀、カルロ・クリヴェッリ作

トマス・アクィナス (1225?-1274)

- 中世ヨーロッパの神学者、哲学者。
- ドミニコ会の修道士でもあった。
- 南イタリアの貴族の家に生まれ、修道士となったのちに『神学大全』（邦訳で全45巻、全著作の1/7）という超大作を執筆。

「単に輝きを発するよりも照明する方がより大いなることであるように、単に観想するよりも観想の実りを他者に伝える方がより大いなることである」

(II-II, q. 188, a.6)

→真理を知るだけでなく伝えることが大事

神学的徳

‘それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。
その中で最も大いなるものは、愛である。’
(コリントの信徒への手紙一 13:13)

「徳（アレテー）」

古代ギリシャ哲学：

- 他人の心を動かし、支配する能力（ソフィストたち）
- 幸福のための正しい振る舞い（アリストテレス）

→キリスト教においては「信仰」「希望」「愛」

：聖書に基づきながらアウグスティヌス以降、古代ギリシャ哲学を受容しつつ新たな「徳」概念が形成されていく

日常における「信」

人間の共同生活においては、一人の人が、自分では充分でないものにおいては、他の人を自分自身のように用いることが必要であるから、他の人は知っており自分自身には知られていないものに対して、自分自身が知っているもののように依拠しなければならない。それゆえ、人間の交わりにおいては、一人の人が、他の人の言明をそれによって信じるところの信（fides）が必要なのである。（『ボエティウス三位一体論註解』第三問題第一項）

→他者と生きていく上で「信じる」は不可欠な要素

→直接的な経験知や学問的知識だけではない「知識」を信じる

「知ること」としての「信じること」

相手の言うことを全て疑っていては関係が築けない

→とりあえず受け入れてから整合性や妥当性について判断する

→知ってから信じるのではなく逆

→相手を信じて深く付き合うことによって初めて見えてくる姿

→「信じる」ことが「知る」ことの新たな可能性を開く

「愛あるところ、そこに眼がある Ubi amour, ibi oculus」

知性の承認としての信仰

『神学大全』 第二部の第二部第一問題第四項

「信仰の対象は何らかの見られたものでありうるか」

信仰とは、信じられる事柄に対する知性の承認を意味する。

ところで、知性はあるものに二通りの仕方で承認を与える。

一つには、知性が承認を与えるように対象そのものによって動かされるからである。

→ 「直知 intellectus」 / 「学知 scientia」

もう一つの仕方においては、知性は、固有の対象によって充分に動かされるからでなく、むしろ何らかの選択によって意志的に、一つの側にではなく他の側へと傾きつつ、承認を与える。

そして、もしこのことが疑い、および他の側の怖れを伴ってなされるならば、臆見（opinio）が存在するであろう。それに対して、このような怖れなしに確信をもってなされるならば、信仰（fides）が存在するであろう。

→直接には知ることができないことに対して恐れなく確信する

「我々の感覚には現前していないとしても、信じられている事柄もまた、我々は精神によって見ている」（『定期討論集 真理について』）

→より豊かな「知る」を生み出していく

「信じる」ことは軽率でないか？

奇跡においては二つのことに着目することができる。一つは、為されるところのこと、すなわち自然の能力を超える何らかのことである。この意味で奇跡は「力 *virtus*」と呼ばれる。

もう一つは、諸々の奇跡がそのために為されるところのこと、すなわち、何らかの超自然的なことを明示するためという点である。この意味で奇跡は一般的に「徴」と呼ばれる。

(II-II, q.178, a.1, ad3)

→感覚や理性を超えた超自然的なことを知るための「徴」

「徴」は「証明する」のではなく
「諸々のふさわしい証拠によって提示する」

→聖書で語られていることの「ふさわしさ」
：必然的な論証ではない、だからこそ自由意志によって信仰される

キリスト教において「信仰」とは、苦しい時の心の支えとか必要なものを手に入れるための手段というよりも、永遠の愛という積極的な内容を「知る」、そしてそれによって生き方が変わっていく「力」の源と言える

話し合ってみよう

- 1、自分が「信じている」と思えるものは何ですか？
- 2、どのようにしてそれを「信じる」ようになったと思いますか？
- 3、それを信じ続けていくには何が必要ですか？

「希望」とは

「信仰」も「希望」もないイエスキリスト？

→ 貧しい大工の息子/逮捕、そして十字架での処刑

→ トマスによれば、キリストは苦しい生涯を送ったから「希望」がなかったのではなく、神の愛を完全に「知って」いたため「希望」も「信仰」も必要なかった

「信仰」は物理的次元を超えた精神的次元のより深い「認識」のこと→「直知」でないが楽観や幻想でもない

→ 「希望」：主観的には見通しを持ちにくい中で、信じるものの存在に常に魅了されながら肯定していくことで状況の困難を克服していく

旅人としての希望

トマスの人間観：「現世 via」という「道 via」を歩む「旅人viator」

→旅人である限り、目的地には達していない。しかし旅人であるかぎり常に「目的地」に方向づけられている

→トマスにおいて、「希望」は人間らしくあるための条件

『神学大全』 第二部の第一部第六十二問第四項

感覚によってあるいは知性によって捉えられたものでなければ、欲求的運動が、希望することによって、あるいは愛することによって、何らかのものへと向かうことはありえない。ところが、知性は、信仰によって、希望するもの、そして愛するものを捉える。それゆえ、生成の順序に基づく、信仰が希望と愛特に先行するのでなければならない。

→認識されないものは欲求されることがない

同様に、人はあるものを自分の善として捉えることに基づいてそのものを愛する。ところで、何者かから善を獲得することができる人と人が希望を抱くことによって、人はその希望をかけている者を、何らかの自分の善とみなす。それゆえ、人が何かに希望をかけるというまさにそのことに基づいて、人はその者を愛することへと進んでいくのである。

→何かを希望する/誰かに希望することの区別

「希望」は求める対象だけではなく、その獲得を助けてくれる「誰か」にも関わっている

→「誰か」その存在自体を善として愛するようになる（「愛徳」）

自己超越の原理としての希望

希望が人を神へと向かわせるのは、到達すべき究極的善、そして助けを与える何らかの扶助者に対する仕方においてである。他方、愛徳は、本来的には、人間の情動を神に一致させることによって、人間を神へと向かわせるのであり、そうした仕方で人間は自己のためではなく神のために生きるようになるのである。

(II-II, q.17, a.6, ad.3)

→「自己の善」を求めて真摯に生きること自体のなかから、自ずと、「自己のため」という視野狭窄的なあり方を超えた共存へと開かれていく

「絶望」という危険

『神学大全』 第二部の第二部第二十問題第三項

我々の側から絶望が他の二つの罪（不信仰と神への憎しみ）と比較されるならば、絶望の方がより危険である。というのも、希望によって我々は悪から呼び戻されて善を追求することへと導き入れられるのであるから、希望が取り去られると、人々は抑制なく諸々の悪徳へと滑り落ち、良き業から引き離されるからである。

→「希望」は「困難ではあるが、自らによってまたは他者を通して獲得可能な善」に関わる

「信じる」「希望」が与えてくれる完全性